調査コラム～史料調査の現場から　第 20 回

松平宗衍・治郷親子の病（やまい）

1. はじめに--治郷の病

松江城・史料調査課の業務の一つに、「校正作業」があります。「校正作業」とは、「松江市ふるさと文庫」や「歴史史料集」など、出版予定刊行物の原稿の誤りや不備を訂正する作業です。特に筆などで書かれた、いわゆる「古文書」を活字化（翻刻）した「歴史史料集」などの校正は、原本に書かれた文字と原稿を見比べ一字一字確認していく、古文書解読能力も必要な作業となります。

今回のコラムでは、その校正作業中に見つけた、松江藩６代藩主松平宗衍（むねのぶ）・７代藩主松平治郷（はるさと・号不昧）の病-痔-について述べたいと思います。痔は、薬がテレビの CM や新聞の広告欄に掲載されるなど、現代人にもなじみのある病気だと思いますが、江戸時代の人にもよくある病だったようです。あまりきれいな話ではないので、適宜自衛をしてお読みいただければ幸いです。

2. 宗衍・治郷親子の病

前年度から、私は松江藩７代藩主の松平治郷に関係する歴史史料集『松平治郷（不昧公）関係史料集』（2022 年、2023 年発売予定）に掲載する史料の校正作業をしています。掲載史料の一つの「御立山奉行『御用日記』」【図 1】の校正中、寛政３（1791）年 10 月２日の内容が目に入りました。

一、殿様御痔疾追々御快被成御座候付来月五日六日（カ）、又者九日十一日之内江戸表御発駕被遊候旨御内御儀定被仰出候由（後略）

これを簡単に訳すと、殿様の痔疾がよくなってきたので、来月５・６日か、または９～11 日の内に江戸を出発するということです。

同じ年の４月 21 日に「一、江戸御発駕為御祝儀御次衆被罷越候」（訳：江戸御発駕のご祝儀のため、御次衆が参られた）と、治郷が江戸を発つ際のご祝儀の記述があったので、通常であれば５月 15 日あたりには松江に着いているはずです。まだ江戸にいる、ということは、治郷は４月に江戸を出立しようとしたけれども、10 月までの約半年、痔で動けなかったということになります。

【図 1】御立山奉行「御用日記」（米村家文書 1-1-1、松江市蔵）
藩主の遊興場だった楽山（西川津町）を管理していた御立山奉行、
武蔵弥三右衛門と高橋織弥の日記

【図 2】「温故録」三（島根大学附属図書館蔵）
松江藩が出した政令を年代順に書き連ねたもの

一体どんな症状だったのだろう？と気になりつつも、そんなことはすっかり忘れて、同じく『松平治郷（不昧公）関係史料集』に掲載する「温故録」の校正にとりかかったところ、明和２（1765）年 11 月 13 日に以下のような記述がありました。

> 殿様御痛所稲葉丹後守殿御外科宮地節三江御療治被仰付候処御同篇二付、紀州様御外科近藤良三江御転役被遊候処、御相応不被遊候二付、又々宮地節三江御療治被仰付候、尤御痔漏之事二候得者、中々急二御平癒者不被遊候之旨申述候由二候、右二付而当年者御帰国不被遊趣二候、右為御知可申旨二候、以上
> （「温故録」四）

これは治郷の父・６代藩主宗衍の時の記述ですが、宗衍に痛いところがあったので、稲葉丹後守のお抱え外科医の宮地節三に治療を仰せつけていたが変化がなかった。そこで、紀州様のお抱え外科医の近藤良三へ転医した。それでも良くならなかったので、また宮地節三に治療を仰せつけた。もっとも痔漏（痔瘻・じろう）のことなので、なかなか急にはよくならないとのことだ。そのため今年は帰国ができない旨お知らせする。ということが書かれています。

「宗衍、お前もか……」とは思ったものの、宗衍はこの年の４月初旬から短くとも 11 月まで、実に半年以上「痛いところ」により苦しんでいます。この後も医者や薬を変え、苦痛に耐える宗衍の姿が見られますが、天明２（1782）年にも４月頃から食欲不振・浮腫・痔疾からの出血があり、同年 10 月４日に死去しています。その病状はあまりにも痛ましく、短い文章の中からも辛さがにじみ出ています。宗衍を苦しめていた痔瘻とは、どのような病なのでしょうか？

3. 痔瘻とは

ウェブサイトを参照して簡単に説明すると、痔瘻は直腸・肛門部の感染症です。直腸や肛門周囲にうみがたまった段階を肛門周囲膿瘍といい、たまったうみが排出され、結果として直腸、肛門と交通のある難治性の管ができると痔瘻といいます。体の抵抗力が弱って下痢をすると罹ることがある病気で、肛

門周囲膿瘍になってうみがたまると、39℃からひどい時は 40℃以上発熱します。うみがたまった部分が赤く腫れる場合もあり、夜も寝ていられないほどの激しい痛みが生じる病気とのことです。

現在は手術で治癒するそうですが、当時の治療法は民間療法や漢方薬の軟膏の塗布だったので、痔瘻は不治の病といえるでしょう。

４．治郷の痔とその後の経過

宗衍は史料中に痔瘻と書かれていたので病名がはっきりとわかるのですが、治郷については「痔疾」としか書かれていません。ヒントは、「温故録六」の「殿様御麻疹後御痔疾之御気味被成御座候二付而（後略）」（訳：殿様、麻疹後に痔疾気味になられたので…）という記述なのですが、この記述と数か月動けないことから推察すると、ひどいいぼ痔か肛門周囲膿瘍あたりかもしれません。

安永５（1776）年、26 歳の時に治郷が痔を発症してから、いろいろな史料にその様子が書かれていますが、ここでは『松平治郷（不昧公）関係史料集』に収録する史料の中に書かれたものを紹介します。→別紙【表：史料に見る治郷の痔事情】参照

安永９（1780）年６月、治郷は参勤交代のため一度江戸を発ったものの、痔により引き返し、８月まで養生しています。天明８（1788）年・寛政３（1791）年・寛政４（1791）年・寛政８（1796）年にも「長く座ることも、駕籠に乗ることもできません」などと記述があり、江戸から松江、または松江から江戸へ向かう時期を半年程度遅らせています。また、寛政元（1789）年には、痔で歩行が困難になり、江戸城内で杖を使用する許可を得ています。

治療についてはあまり記述がありませんが、享和元（1801）年、松江滞在中に桂川甫周が痔を治療したと聞いて、普段よりも少し時期が早い翌年３月に江戸へ行き、治療する許可を幕府に申請しています。しかし治癒はしなかったのでしょう。治郷の最晩年である文化 13（1816）年、玉造温泉に湯治のため滞在しています。湯治のためかどうかはわかりませんが、その前の文化５（1808）年にも玉造温泉には滞在しています。

これらの史料から、座ることも歩くこともままならない痔の辛さと、良医を求め湯治に通うなど、治療に励んでいた治郷の姿が伺えます。華岡青洲が麻酔薬を作ったばかりのこの時期には、やはり手術は一般的ではなかったことでしょう。

５．おわりに

ここまで、『松平治郷（不昧公）関係史料集』に掲載する史料からわかる宗衍・治郷親子の病-痔-について述べてきました。宗衍や治郷は 200 年以上前に生きたお殿様であり、また治郷は茶の湯会のスターという遠い存在ではありますが、密かに現代人にも共通する病に罹っていたと思うと、少し親近感がわきませんか？

『松平治郷（不昧公）関係史料集』第１巻（税込 4950 円）は、2022 年４月発売です！

（松江市文化スポーツ部松江城・史料調査課／高橋真千子／2022 年４月５日記）

【参考文献】

- 「温故録」三～七、島根大学附属図書館蔵
- 「御用日記」松江市蔵
- 「大円公年譜」島根県立図書館蔵
- 「病草紙」土佐光長画［他］（楽春院写、1854）、国立国会図書館デジタルコレクション
- 松江市史編集委員会『松江市史』通史編３「近世Ⅰ」、2019 年３月
- 西島太郎「松江藩主の居所と行動-京極・松平期-」『松江市歴史叢書』２号（『松江市史研究』１号）、松江市教育委員会、2010 年３月
- 三枝純一・三枝直人・三枝純郎「Ⅰ.痔核治療の歴史的変遷」『日本大腸肛門病会誌』第 63 巻 10 号、2010 年 10 月
- 「病院検索ｉタウン」ウェブサイト